



# 第12号

「田岡嶺雲と徳田秋聲との出会い」	1
トピックス	7
入館者15万人達成	7
ミュージアムショップ通信	8
リバーサイドニュース・寸々語	8
館の案内・編集後記	8
題字・徳田秋聲	8
「田岡嶺雲と徳田秋聲との出会い」	1
新刊案内・グッズ案内	3
企画展示報告	4
新収蔵資料紹介	5
事業報告	6

西田勝氏 講演録(抄)

れいうん

## 「田岡嶺雲と

## 徳田秋聲との出会い」

令和元二〇一九年11月16日(土)、秋聲忌第二部の記念講演に文芸評論家・西田勝氏をお招きしました。その講演要旨をお届けします。

### 文芸評論家・思想家としての嶺雲の歩み

田岡嶺雲には秋聲だけではなく藤岡作太郎をはじめ泉鏡花・得能文・国府犀東・桐生悠々など、金沢の人々と縁がありました。これは嶺雲の故郷が「自由は土佐の林間から出づ」と言われた高知だったのと、日本における市民自治の先駆の一つだった一向一揆のあった金沢との無意識からの共振だったのでしょうか。

嶺雲は、投書雑誌『青年文』の主筆として知られています。それが彼の文芸批評家としての出発点ですが、それ以前、東京帝国大学在籍時から大変な勉強家で、英語やドイツ語も堪能、原書でショーペンハウアーの代表作を読んだり、漢訳の大部の大蔵経を読破したりしました。後者では「印度の神秘説」と題して瑜伽(ヨガ)を論じ、恐らく日本で初めて、その多様なポーズをも紹介しました。古代インド哲学は宗教と一体で、バラモン教と言ったり、ヴェーダ哲学と言ったりしています。その頂点は「ウ

パニシャッド」という經典で、その根本は「あなたは私である」というもの。それが西方へ伝わって「隣人愛」を説くキリスト教になり、東方では仏教となり、日本にも及びました。

嶺雲に、そのようなグローバルな視野を開いてくれたのは、ショーペンハウアー哲学でした。そこから彼の「東

西文明の融合」という主張も生まれました。ショーペンハウアー哲学を日本で初めて紹介したのは、東京帝大の哲学教師だった井上哲次郎です。嶺雲は彼の講義を聞いて、この哲学の存在を知ったのではないかと思います。夏目漱石が、そのエッセーで触れている「ケーベル先生」もショーペンハウアー哲学の学徒の一人でした。

戦前、旧制高校で「デカンショ節」というのが流行りました。「デカンショ」というのは近代哲学の代表者、すなわちデカルト、カント、ショーペンハウアーを縮めたものです。

カントは物事には「現象」と「本質」があると観ていました。われわれが感覚できるのは現象あるいは個体で、その奥に「本質」がある。現象は「個」として現れ、「個」でなければ生命はなく、人間一般としては生きられない。では、目に見えない現象の奥にある「本質」とは何か。カントは、それを何だか分からない「物自体」としました。東洋では、老子が、それを「玄之又玄」と言いました。「玄」とは暗いという意味で、暗いだけでは不十分で、暗さの奥にある、さらなる暗さだと言いました。

ショーペンハウアーは、その主著『意志とその表象としての世界』の題名に見るように、カントの「物自体」は

「意志欲望」だと考え、この世界は「欲望」とその「欲望」が展開して行く姿だとしました。かのドストエフスキーも、この哲学の影響の中で、現代人のモラルを、「朝一杯のおいしいコーヒーが飲めれば、世界なんて亡びたつて構わない」と表現しています。まさに現代の拝金主義、利己主義を一言で表した言葉です。

哲学は一般に存在論と認識論とで成り立っています。嶺雲はショーペンハウアー哲学から以上のように、その存在論から啓発を受けただけではなく、その認識論からも影響を受けました。現代社会では知性や知識は欲望の道具に過ぎない。彼が評価するのは感性、より正確に言うと、その上に立った観察、つまり直観ですね。自分の眼で対象を細かく観察し、それを自分の頭で観念(知識として組み立てる。そこにこそ本当の真実がある、)と行うことです。それによって、嶺雲は他の人に先んじて樋口一葉や泉鏡花、さらには夏目漱石や木下尚江の才能を高く評価しました。

嶺雲が水産伝習所にいた時、ひとりの労働者が日比谷公園のベンチに横たわっているのを見て、「どうして寝ているのですか?」と尋ねると、彼は「動く体力を消耗するから」と答えました。嶺雲は、この時、改めて貧困の問題に直面します。少年時代から自由民権運動に参加した嶺雲ですが、民権運動とはフランス革命由来の「自由・平等・博愛」の精神を継ぐもの。しかし、現代の日本には本当の自由も平等も博愛もないということに気がつく。近代資本主義は確かに文明の進歩をもたらしたが、同時に新たな貧困と差別を生み出しました。これを無くすには維新に次ぐ「第二の革命」が必要と考え、最終的に



は「国家」を超えた、差別や貧困のない「地球共同体」の到来を夢見ました。

このような考えを最初に表明したのは「異性の私有」(新聞いはらき一九〇三年三月)という文章で、「財産に私有なければ偷盗なくして共産あり、異性に私有なければ不貞なくして恋愛(真の)あり」と言いました。

コミュニズムCommunismを「共産主義」と最初に訳したのは東京帝大初代総長の加藤弘之ですが、本来はコミュニティと同根ですから、正確には「共同体主義」と訳すべきでした。不平等や差別のない「原始共同体」に帰ろう、ということです。

人類史の上で農耕社会が始まり、私有財産が発生、その財産を自分の子に継がせたいという欲望から結婚制度つまり家長制(君主制はその結果の一つ)が生まれ、それによつて女性は一切の権利を失いました。エンゲルスという「女性の世界的な敗北」です。それは大多数の男性にとつても「敗北」で、階級社会が生まれただけではなく、性的自由も失います。つまり結婚と売春と姦通は三位一体です。秋聲が繰り返し描き出した世界です。それを東洋的な見地から鋭く突いたのが同じ金沢出身の作家泉鏡花の「愛と婚姻」(「太陽」一九〇五年五月)です。「結婚を以て愛の大成したるものとすは、大なる誤りなるかな」、「情死、墮落、勘当等、これ皆愛の分(ぶん)ぱん」と書いています。なかなか過激な文章ですが、鏡花の絢爛さは、この過激さから来ていると思います。それは秋聲がそうありたいと願いながら、出来なかつた姿勢でした。しかし、そこに秋聲の独自性も生まれてくるわけですが。

### —— 嶺雲と秋聲

こうした主張を含んでいたことから、日露戦争の最中に出した嶺雲の第四評論集『壺中観』(一九〇五年三月)は発売禁止となりました。実は最初の評論集『嶺雲揺曳』(二八九年三月)と続編の『第二嶺雲揺曳』(同年一月)は合わせて二万部近くも売れ、当時としては異例のことでした。

彼が当時、著名な評論家だったことは、死後、『読売新聞』が二頁を割いて追悼記事を載せていることから知られるでしょう。著作が次々と発売禁止になったことに対する同情と抗議もそこにあつたのではないかと思います。

晩年には幸徳秋水と親交があり、もし脊髄癆を病んで足が不自由でなかつたら、嶺雲も大逆事件に連座させられ、秋水と同じように死刑台に上がつていたかも知れません。

嶺雲と秋聲の出会いは一八九五年、秋聲が博文館にいた頃のことです。『青年文』に秋聲が投稿したことがキツカケでした。嶺雲に『青年文』の主筆になることを要請した英文学者の山県五十雄は、私の学生時代まだ健在で、私は彼を訪ね、その時、秋聲の投稿名が「誇学生」と「善罵子」であることも確かめました。「誇学生」名の作品は、どういうわけか八木書店版の『徳田秋聲全集』には収められていませんが、それは『帝国文学』所載の論文を取り上げ、論者の知つたかぶりを揶揄したもの、青年秋聲の心意気を感じられます。この二つの投書の後、嶺雲の求めに応じて初めて『秋聲の名で「断片」という小説を発表します。さきの『全集』では評論の部に収録されていますが、これは間違つた編集で、秋聲の自伝小説『光を追つて』(一九三八年一月)にもゴールドスミスの『ウェークフィールド』の司祭『The Vicar of Wakefield』まがいの小説を発表したとあるのがそれです。

秋聲も当時の智識青年らしく、その英語の読解力を生かして丸善からモーパッサンやゴッリキーなどの洋書を手に入し、読んでいました。

ゴールドスミスは表も裏も、相対的に物事を見ながら書く作家でした。秋聲の場合も初期から、そのような傾向があります。秋聲には嶺雲同様、老荘哲学への傾倒があつたようです。莊子の『斉物論』もまさに世界の相対性を論じたものです。

『断片』では一方では「現代の文学に大家なきは読書家ありて真個(まご)の天才なきに因らずんばあらず」(一)は引用者として知性への懐疑を示し、他方では「人權を称道す

ること今の世の如く喧しくして、而して人權を枉屈する主僕の階級の社会の到所に発見さるゝは果して何故ぞや／＼申略もしわれをして世界を専制せしめば、胸間の感情を提来りて最も公平なる組織を民人の上に加ふるを得んか」と「主僕の階級のない平等の社会を求めていきます。まさに嶺雲の主張そのものです。

嶺雲の自伝『数奇伝』(一九二二年五月)に秋聲が寄せた序文や、その翌年に死去した嶺雲への追悼談話「逝ける田岡嶺雲」(大阪新報同年九月)及び追悼文「故嶺雲兄」(読売新聞同年十月)などを見ると、秋聲が嶺雲の人物像を正確に捉えていたことが感じられます。

### —— 「社会小説」をめざした秋聲

私は学生時代、嶺雲との関係を尋ねたく、秋聲の遺族に会いに行つたことがあります。長男一穂の夫人でした。しかし、嶺雲の書簡はないと言われて帰つてしまつたが、現在、二通の書簡の存在が確認されています。一つは一九〇八年一月二七日消印のもの(さきの『徳田秋聲全集』別巻に収録)、二通目は一九一〇年一月以降と推測されるもの(未収録。いずれも徳田家所蔵)。最初のものは、嶺雲が自身の訳したゴッリキーの『三人』について小説家としての添削や出版社の紹介を打診したものの(さきの『全集』では論稿となっていますが誤読。「訳稿が正しいで、二通目はモーパッサンなどの横文字の小説類の貸し出しを依頼したものです。この時代、二人は実生活の上でもかなり近づいていたようです。

嶺雲は社会小説の提唱者と見られていますが、実は当時、「社会小説」を提唱したのは、徳富蘇峰たちの民友社でした。嶺雲は、むしろ、その主張には批判的で、「社会小説」(文庫)一九〇七年五月という文章の中で「複雑なる社会の現象」を題材にするのはよいが「微妙なる個人の性格を描く」のを忘れたら「大なる誤り」、「個人の性格を中心として、其境遇の変化を写すこと」が大切と言っています。秋聲もまた、それに呼応するかのように「真の社





西田 勝 氏

文芸評論家。法政大学定年教授。  
2019年2月に半世紀をかけ編纂した『田岡嶺雲全集』  
全7巻(法政大学出版局・1969年～)を完結させた。  
『日本近代文学館』の名付け親としても知られる。

会小説(『文章世界』一九〇六年一月)で、どちらかといえば、自分は「社会小説」に興味はあるが、それは「小説中の人物の思想性格を詳しく明瞭に書現はさなければ、文学上の価値はあるまい」と書いています。  
秋聲のめざしたのは、彼なりの「社会小説」だったと思います。これまで、秋聲の文学はもっぱら自然主義との関係から論じられて来ましたが、ソロソロそのような「早稲田文学」史観から解放される必要があるのではないのでしょうか。  
出世作の『新世帯』(一九〇九年)をはじめ『黴』(一九二一年)、『あらくれ』(一九一五年)・『仮装人物』(一九三八年)を経て『縮図』(一九四六年)に至る代表作を見れば、どれも一種の「社会小説」です。たしかに秋聲の文学は日本の自然主義文学運動に影響をあたえ、また秋聲もこの運動に学んでいます。『あらくれ』は嶺雲の女性解放論を想起させるし、また『縮図』には、これまでの秋聲の小説には見られなかった社会批評もストリートに挟み込まれ、情報局の圧力によって執筆中止に追い込まれています。それ以前、反ファシヨの「学芸自由同盟」の幹事長を引き受けています。抑えられていたものが、晩年、噴き出て来たのではないかと思えます。

### 新刊案内

黒崎正己  
『新聞記者・桐生悠々 村度ニッポンを「啜う」』

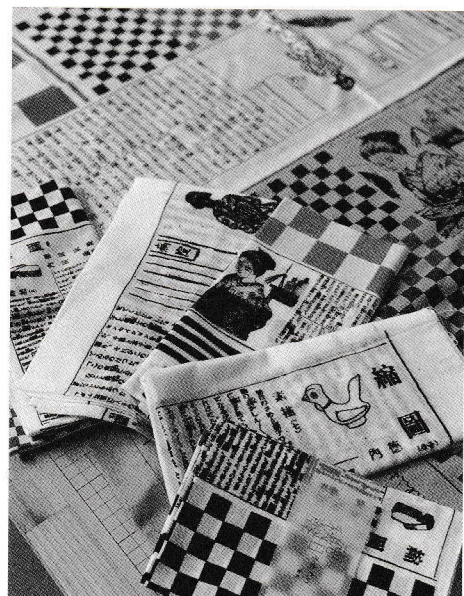


発行日 令和元年10月5日  
発行者 現代書館  
価格 1700円(税別)

著者は北陸朝日放送報道制作部長。平成30年に同局で制作・放送されたドキュメンタリー番組「言わねばならぬ」こと新聞人・桐生悠々の警鐘の担当ディレクターをつとめ、同番組は第1回「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」大賞のほか、第25回「プログレス賞」最優秀賞を受賞。それをきっかけに、令和元年年末から新年にかけて全国で放送されました。

本書は番組制作のための緻密な取材を元に構成された桐生悠々の評伝で、竹馬の友である秋聲とのかかわりや、太平洋戦争に対する双方の姿勢についても論及があります。  
悠々の遺族や現役のジャーナリストにも積極的に取材し、単なる評伝を超え、この現代社会において悠々という人物を、またその思想についてどう受け止めるべきか、大きな問題を投げかけてくる一冊です。

### グッズ案内



令和元年、地元企業が中心となり、秋聲の代表作『縮図』をモチーフにした新しいグッズの開発がおこなわれました。

『縮図』は、昭和16年6月5日、「都新聞(現「東京新聞」)に連載された長篇小説です。しかし太平洋戦争開戦間近という状況下、花柳界を描くことが不謹慎として情報局からたび重なる圧力を受け、秋聲は妥協すれば作品は臆抜けになる」と第80回を最後に筆を折ります。その三ヶ月後に開戦を迎え、戦中の昭和18年に秋聲が死去したため、未完の絶筆となりました。

今回のグッズでは、「都新聞」連載当時の紙面を生かし、秋聲の本文、内田巖による挿絵、そして新聞の活字のニュアンスがそのままデザインとして用いられています。風呂敷、手ぬぐい、タイツなどの展開があり、人々の生活に常に寄り添い、かつ女性を主眼に据えて描く秋聲の小説スタイルが反映された逸品です。

これらの一部は、4月から当館内ミュージアムショップでも取り扱う予定です。